

講演者およびパネリストプロフィール

ダニー マシューズ (Dr. Danny MATTHEWS)

1971年リバプール大学卒業、獣医師。リバプール熱帯医科大学で博士号を取得し、ニュージーランドで研究活動後、1978年英国農漁食料省入省。獣医官として10年間つとめた後、1988年6月、英国獣医局本部に異動、BSE撲滅に携わる現場スタッフへの指導を行うとともに、BSE撲滅プログラムの運営を行う。政策グループへのアドバイザーとして、特にBSE研究政策の検討に関与し、1995年9月、SEAC(海綿状脳症諮問委員会)技術アドバイザーに任命される。2003年9月より、VLA(英国獣医学研究所)に異動し、TSE(伝達性海綿状脳症)の研究及びサーベイランス・プログラムの監督を行っている。現在は、DEFRA(英国環境食料農村地域省)におけるTSE対策アドバイザーを勤めるとともに、英国食品基準庁、OIE(国際獣疫事務局)、WHO(世界保健機関)及び欧州委員会への助言も行っている。

ダグマー・ハイム (Dr. Dagmar HEIM)

ベルリン自由大学卒、獣医師。ベルン大学で家畜神経系疾病疫学遡及研究等を行う。その後、ウイルス免疫学的予防研究所で家畜衛生に関する調査等に従事。1996年からスイス獣医局に勤務、現在、同局TSE調整官。伝達性海綿状脳症組織に関わる研究について統括しており、また、諸外国政府機関やNGO組織との調整役として活躍している。1999年からOIEのBSE特別委員会の委員を務め、GBR(BSEの地理的リスク)ワーキンググループ等、BSEに関する多くのワーキンググループに参加して活躍している。TSEおよびBSEに関する疫学調査論文、リスク評価およびリスク管理に関する著書多数。

スチュアート・マクダイアミド

(Dr. Stuart CAMPBELL MacDIARMID)

獣医学博士。獣医学誌の編集者等を経て、1992～1999年OIE家畜衛生情報システムワーキンググループリスク分析分会委員、1996～2002年NZ政府BSE専門科学委員会オブザーバー、1998～2002年OIE・BSE特別委員会委員などを務める。1998～2002年NZ農務省生物安全局リスク管理部長としてリスク分析手法の確立と実施に従事。BSEの専門家としてカナダ、米国へも助言を行っており、学術論文多数。現在はNZ食品基準庁動物原性感染症及び家畜衛生に対する首席アドバイザー、伝達性海綿状脳症及びサルモネラ食中毒に関する開発プログラムグループ座長。

ゲイリー・スミス (Dr. Gary C. SMITH)

1968年、テキサス A&M 大学で、畜産学博士号取得(食肉科学および筋生態学)。ワシントン州立大学助教授、テキサス A&M 大学教授を経て、現在、コロラド州立大学畜産学部教授。多様な国際的な学会等で活躍し、また、農業科学技術委員会(CAST)、国際食料防疫協会等の委員を務めている。米国食肉研究所先端食肉産業賞、米国食肉科学協会 R.C. ポラック賞およびコロラド州立大学研究基金 2002 年 CSURF 名誉研究者賞など畜産学等の研究に関する受賞多数。畜産および食肉科学に関する著書多数。

なかむら まさみ 中村 雅美 日本経済新聞社編集局科学技術部編集委員

金沢大学大学院薬学研究科修士課程修了。日本経済新聞社入社後、同東京本社編集局科学技術部次長、同出版局科学出版部長兼「日経サイエンス」編集長を経て、現在に至る。

かんだ としこ 神田 敏子 全国消費者団体連絡会事務局長

生活協同組合さいたまコープ理事、日本生活協同組合連合会全国商品活動委員、全国消費者団体連絡会事務局食の安全担当などを経て、2002年から現職。2003年から食品安全委員会リスクコミュニケーション専門調査会委員、国民生活審議会委員。

かねこ きよとし 金子 清俊 国立精神・神経センター神経研究所疾病研究第7部長

昭和58年、新潟大学医学部医学科卒業。平成4年、新潟大学医学博士。東京医科歯科大学神経内科学教室医員等を経てプリオンタンパク研究へ。カリフォルニア大学サンフランシスコ校神経内科学教室アシスタントプロフェッサー等を経て平成11年から現職。現在、厚生労働省薬事・食品衛生審議会委員、農林水産省牛海綿状脳症対策検討委員会委員、厚生労働省厚生科学審議会委員(疾病対策部会クロイツフェルト・ヤコブ病等委員)、内閣府食品安全委員会のプリオン専門調査会及びリスクコミュニケーション専門調査会で専門委員を務める。